

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

危機的状況！ノリ養殖もタイラギも！

ノリ養殖に危険信号…

【佐賀新聞2011年11月8日】
ノリの品質低下招く「赤腐れ病」
有明海で拡大

佐賀県沖の有明海で、養殖ノリの品質低下を招く赤腐れ病が拡大、県有明水産振興センターは漁業者に乾燥の徹底と冷凍網の早期入庫を呼び掛けている。海水温が下がらず、降水量も多くて塩分濃度が低いため、東部から中、西部海域まで被害が急速に広がっている。

センターによると、5日に東部海域で確認され、7日には中、西部を含む広範囲で菌が肉眼視できる2ミリ以上に成長していた。菌は乾かすと死滅するが、5、6日の雨で網を海面より高くする「干出」が十分にできなかったため、急速に繁殖したとみられる。センターは「赤腐れ病が摘み取り前にここまで広がった例は少ない。雨が予想される10日までに、できるだけ干出してほしい」と話す。

【毎日新聞2011年11月9日】
ノリ…赤腐れ病拡大 ほぼ全域で菌を確認 有明海/佐賀

有明海のノリ養殖で、品質低下を招く赤腐れ病が広がっていることが、県有明水産振興センターの調査で分かった。海水温が下がらないことや、降雨量が多く塩分濃度が低いことが原因。

センターは拡大・悪化を防ぐため、網の乾燥や冷凍入庫を進めるよう呼びかけている。

赤腐れ病は、海中の菌がノリに寄生して起こる。網に付くノリが赤みを帯び、色落ちなどの品質低下を招く。センターが7日に行った調査では、県内の有明海ほぼ全域で菌を確認。5、6日に雨が続いたことなどで広がったとみている。

タイラギも危機的状況に

【佐賀新聞2011年11月9日】
有明海のタイラギ 大牟田沖は成貝ほとんど生息せず

有明海のタイラギの生育状況について、主漁場の大牟田市沖で漁獲対象となる成貝がほとんど生息していないことが、佐賀県有明水産振興センターの調査で分かった。太良町沖で生息密度が高い地点もあるが、今季の水揚げは前年の4割に落ち込んだ昨季をさらに下回る厳しい状況が予想される。

8日の県潜水業者会で調査結果を報告した。10月に調査した55点のうち、成貝を確認したのは昨季の17地点を下回る8地点。このうち大牟田市沖など福岡県側の4地点は生息密度が1平方メートル当たり0・1個以下にとどまった。



太良町沖で0・38個の地点もあったが、最大9・7個だった昨季を大きく下回った。

今季は、6〜7月に大牟田市沖で大量死が発生。太良町沖でも7月に貧酸素水塊が原因とみられる死貝が確認された。春先に餌となる植物プランクトンが少なく、平均殻長も13・6センチと漁獲対象になる15センチに達していない。県は21日に再調査し、28日の福岡、佐賀両県の協議会で解禁日を検討する。

赤木勝蔵・県有明海漁協大浦支所運営委員長は「大牟田市沖での操業は厳しい。貝も小さく、解禁日は昨年の12月1日より遅らせるしかない」と見通しを示した。

全開門で宝の海を取り戻せ！

【西日本新聞2011年10月19日】
諫早湾干拓事業潮受け堤防排水門の開門調査をめぐり、農林水産省が環境影響評価(アセスメント)の準備書を公表した18日、準備書には佐賀側が求めた「調査目的の明確化」などは反映されず、「制限開門」の方法が記されており、関係者から「全開門」を求める声が再び上がった。

準備書は6月公表の素案と比べ、農漁業被害防止策を含む対策費に変更はなかったが、制限開門の方法として8日間20センチ開く案が明記された。佐賀大の速水祐一准教授(沿岸海洋学)は「農水省は制限開門の“たたき台”を示したようなもの。県内漁業者の反発は必ず」と指摘し「調査は有明海再生の視点が必要だ」と強調。県有明海漁協の草場淳吉組合長(76)は「佐賀が主張する全開門が尊重されていない」。太良町のタイラギ漁師大鋸幸弘さん(55)も「中途半端な開門ではタイラギ不漁の原因は分からない」と批判した。

農水省は今後、関係者の意見聴取を踏まえ、評価書を作成する。古川康知事は「全開門を原則とする開門方法のあり方について意見を述べてきた。(今後も)関係者と意見交換しながら県の考えを主張していく」とのコメントを出した。